

## トマス・ブレイク・グラバー覚書

村里 好俊 (イギリス・ルネサンス文学)

スコットランド生まれのトマス・ブレイク・グラバー(一八三八〜一九一一)は、長崎を拠点として幕末の日本で武器調達商人として反幕諸藩、とりわけ、薩摩・長州藩に味方して、幕府打倒の切り札的役割を果たしたことで有名である。彼は、安政六(一八五九)年に上海より長崎に渡来し、大浦にグラバー商会を設立して、銃器や軍艦を商い、倒幕の鍵となる薩長同盟の締結に尽力した人物として知られている。また、現在長崎の観光名所のひとつ、グラバー邸のこと、それにまつわる「蝶々夫人」伝説でも、有名だ。しかし、グラバーが日本でしたことは、それだけに留まらない。何しろ二一歳で長崎に来て以来、七三歳で亡くなるまで、五二年の長の年月を日本で過ごしたのだから。そして、その間、日本を離れたのは、一度だけ郷里のスコットランドのフレイザーバラに帰国した時と、八ヶ月ほどアメリカ、スポーカンに土地の投機のために弟アレックスと滞在した時だけであった。彼が日本に滞在したこの五十年余りにわたって、グラバーは日本で何をしたのであるうか。

今回、私が翻訳出版した『帝国の辺境にて——トマス・ブレイク・グラバー伝 *The Life of Thomas Blake Glover: At the Edge of Empire*』(仮題、岩波書店・二〇一一年九月出版予定)は、幕末から明治維新にかけて、その後、明治時代の日本の歩みに関して多大な貢献をした(スコットランドの侍)と称されるグラバーの伝記の決定版として書かれた。従来いくつかの伝記を集大成し、それらにはない新しく発掘された資料を駆使して、それらとは一線を画す出色の出来栄えとなっている。一九世紀後半から二〇世紀初頭までに互る日英関係に関して論争を挑発し、思考を掻き立てる書であり、また『蝶々夫人』において、従来ピンカートンのモデルとされたグラバー神話を崩壊させている。

この本の著者、スコットランド生まれのマイケル・ガーデナ(Dr. Michael Gardiner)氏は、英語・英文学を専攻し、オックスフォード大学ウオダム・コレッジを最優等で卒業後、スコットランドで最も古い伝統のあるセント・アンドリュース大学で、ポスト・コロンIAL理論を援用してスコットランド文学を論じ、博士号を取得された新進気鋭の比較文化論者で、イギリスの名門ウオリック大学英文学科及び比較文化学科で准教授として教鞭を執っている。それ以前には、日本女子大学や千葉大学で、講師あるいは准教授として英文学を講じた経歴を持つ親日家でもある。(昨年、日本人の奥様との間に、女の子が誕生した。)氏の狭い意味で

の専門領域は、文化史というジャンルであると思われるが、氏は極めて多彩な能力に恵まれていて、現在の勤務大  
学では、イギリス文学のみならず、ロシア文学までも教え  
ている。学問的業績としては、『近代スコットランド文化』  
(*Modern Scottish Culture*) を初めとする五冊の研究書と短  
編小説集『エスカレーター』(*Escalator*) を出版している。

以下、本書の内容を明らかにするために、各章の要約を  
記すことにしたい。

## 第一章 出 島

九月、長崎のグラバー邸から眼下の景色を見下ろしながら、著者は一八五九年の九月一九日に長崎に上陸したトマス・グラバーに思いをはせる。グラバー邸のパンフレットでは、グラバーは「グラバー商會を設立し、艦船取引などの貿易に従事。後には造船業、造幣業、炭鉱業、鉄道等の様々な近代産業の日本への導入に関わる。また、討幕派の武士たちの誠実な支援者として明治維新で大きな役割を果たす」と紹介されている。しかし、討幕派の志士の「誠実な」支援者という表現は、グラバーの人生の一面にのみ焦点を当てることになる。実は、自由貿易商としてグラバーの活動の多くは、即興的で、一貫性がなく、状況の変化に合わせたものだった。

グラバーの国籍について述べると、グラバーは通常「スコットランド人」とされるが、父親はイングランド人である。また、そもそも「スコットランド人」というのは公的で明確な範疇ではなく、恣意的なアイデンティティである上、グラバー自身、七三年の生涯のうち五二年を日本で過ごしている。それにも関わらず、グラバーを語る上でスコットランド人としての彼の誇りは、いつも中心問題となる。

## 第二章 スコットランド深北部

グラバーの父、トマス・ベリー・グラバーは沿岸警備隊員として一八二八年にスコットランド北東海岸に面するアバディーンシャーのポーツソイに赴任し、翌年にはメアリー・フィンドレイと結婚した。その翌年には長男のチャールズ、二年後には次男のウィリアム、一八三三年には三男のジェイムズが生まれた。次の赴任地のフレイザーバラに在る間に更に四人の子供、すなわち四男のヘンリー（赤子の時に死亡）、五男のトマス・ブレイク（一八三八年七月六日生）、そのあと六男アレックス、長女マーサ・アンが生まれた。

フレイザーバラは、一八四〇年代には人口約三千人に膨れ上がって活気のある漁港・貿易港だった。この町でトマス・ブレイクは弟のアレックスとともに、外国人商人と日常的に触れ合うこととなる。また、フレイザーバラがトマ



スに大きな影響を与えたものとしては、船の建設や修理のために港に建設された船渠（ドック）である。トマス・ブレイクの日本での事業の一つがドックの建設だったからである。

一八四九年、一家は父の最終赴任地となるアバディーン郊外のブリッジ・オブ・ドンに移り、翌一八五〇年には末っ子のアルフレッドが誕生する。トマスはここで地元の教区学校に通う。トマスや下の弟たちがドン川で遊んでいる間、上の兄たちは既にアバディーン航海運業に携わっていた。

大家族であったため、名門アバディーン・グラマー・スクールに通うことが出来たのは上の三人の兄だけであり、トマス・ブレイクはギムナジウム（シヤノンリー・ハウス・スクール）に自宅から通い、そこで古典、文学、数学、宗教などを学んだ。トマス・ブレイクがギムナジウムで受けた保守的で厳格な教育は、後に彼が日本で擬似外交官として紳士的に振舞う際に役に立っている。

その後トマス・ブレイクは、ジェームズ・ジョージ船舶会社の事務員を経て、アバディーンの若者たちがあこがれるジャーディン・マセソン商会（特に極東との取引をする海外貿易会社）に入る。そして一八五七年、一八歳にして中国の上海に赴任することになる。父親はこれを喜びも、悲しみもした。その上、一八六七年までには彼の他の息子

たちも、ことごとくトマス・ブレイクに続いて海外（主に中国と日本）へ船出することとなったため、定年退職して家族とともに過ごしたいという父の願いは、所詮、叶わなかった

### 第三章 中国での噂

ジャーディン・マセソン商会は、アヘン戦争後の中国で無情な自由貿易を行っていた。アヘン戦争後の南京条約（一八四二年）により、中国は香港を割譲し上海を含む五港を西洋諸国に開港、そしてジャーディン・マセソン商会はその香港で設立された。グラバーは一八五七年一月二五日に上海に到着し、故国から遠くかけ離れた場所での仕事に没頭した。当時の中国は太平天国軍の反乱という国内問題も抱えており、混乱した状況にあったが、一九歳のグラバーはとにかく積荷を下ろす仕事に専念した。上海での主要な取引品目は、絹・茶・アヘンであった。上海の港の近辺には外国人商人向けの酒場や売春宿もあり、若いグラバーは買春することはあっても、アヘン取引にはほとんど手を出さなかった。

野心家のグラバーは次第に仕事と酒と買春だけの生活に飽きてきた。上海にはチャンスもあるが寂しさや不安もあった。グラバーが上海に到着する以前から、更に東の国が開国したとの噂があった。アメリカのペリー提督率いる

軍艦が日本にやってきて、一八五四年に下田と函館を開港させたとの噂は、上海の商人たちをも魅了した。この頃の日本は幕府が支配していたが、幕府に反対し朝廷に近づく大名もいた。反幕派の大名たちの勢力は特に九州で強かった。一八五〇年後半まで、上海の貿易商にとって、二百年以上も鎖国をしていた日本は、簡単に出入りできないブラックホールだった。

イギリスはアメリカの数年後に日本に来航し、一八五九年安政の五カ国条約の締結に中心的な役割を果たした。上海が日本という未知の国の噂で持ちきりになったとき、グラバーも興味を持った。ジャーディン・マセソン商会は、日本へ行く有志を募り、グラバーの先輩であるケネス・ロス・マッケンジーがまず長崎に渡った。彼はやがて顔見知りのグラバーを上海から呼び寄せた。

長崎に上陸したグラバーは、町や人の様子が上海に比べてかなり整然としていて驚いたはずである。安政の五カ国条約の施行後、出島は外国人居留地の一部となったが、攘夷運動の盛んな時で、外国との通商を認めない攘夷派の志士たちが、各地の居留地で領事館や教会、外国商人や彼らと取引する自国の貿易商人を襲った。大きな事件としては、一八六一年七月に江戸のイギリス公使館を数十人の侍たちが襲撃し、書記官のローレンス・オリファントと領事のジョージ・モリソンに深手を負わせた。九州在留の

外国人商人たちも恐れをなし、警戒する日々が続いた。グラバー来日後数年間続いたこの危険は、攘夷運動が反幕の侍だけでなく、幕臣たちの中にも広がっていたことで、よりやっかいなものとなっていた。在留者にとつてどの侍が危険で避けるべきか判断がつきにくかったのである。しかしグラバーはすぐにこの攘夷派の怒りをうまく利用して商売をすることになる。

#### 第四章 一攫千金を夢見て

グラバーの当初のもくろみは、ジャーディン・マセソン商会の多くの若者と同様、極東で金を稼いだらさつさと国に帰るといふものだった。安政の不平等な五カ国条約の後、横浜、長崎、新潟、神戸、函館に治外法権を有する居留地が設けられ、アメリカ、イギリス、フランス、ロシアに在留権が与えられた。長崎は、鎖国時代からオランダとの通商の歴史や中国に近いという地理から最も活気ある港となった。

同じ在留イギリス人でも貿易商と外交官の関係は微妙であった。専ら利益を追う商人たちは、外交官から見ると節操がなかった。グラバーとマッケンジーは、危険と違法性を承知の上で反幕派の侍たちとの交易を始め、他の貿易商より利益を得た。攘夷派の侍たちは武器を求めた。

一八六一〜二年頃、グラバーは、反幕派の侍たちが幕府



を倒しそうだということを理解し始めた。しかしグラバーと反幕派の侍たちとの交渉は、グラバーにとつて、商人としてより儲けるチャンスを求めてのことだった。従つて、一八六〇年代後半まで、グラバーは反幕派と幕府の両方と商いをした。一八六四年から六七年の間に、グラバーは幕府に三隻の艦船、多量の銃、銀塊などを提供した。

一八六一年にマッケンジーが上海に戻つた後、グラバーはジャーディン・マセソン商会の長崎代理人となつた。また、仲間のフランシス・グルームとともにグラバー商会を設立し、翌年には来日した兄のジェイムズが共同出資者に加わつた。マッケンジーは上海へ帰る前にグラバーの家の建設を目論んで南山手の土地を買つた。「一本松」という名で知られ、小山秀之進によつて建設されたこの家は、和洋混合の奇妙な作りであつた。グラバーが事業家として最初に着手したのは、茶葉の製造だった。日本の緑茶の茶葉を焙り直して乾燥させ再製する事業である。茶葉の製造はさほど利益をもたらさなかつたが、グラバーが貿易商であるだけでなく事業家でもあることを印象付けた。

## 第五章 帝国の辺境にて（一）——大英帝国

グラバーが来日した頃の日本は混乱していた。それは単に叛徒たち対幕府という構図ではなく、叛徒たちの間にも

の敵として団結するようになり、幕府を出し抜くために西洋の技術に目を向けるようになった。彼らが目を向けた外国人在留者たちの中心にグラバーがおり、一八六一年に薩摩藩がイングラランド号を購入して以来、グラバーは船舶の取引に関心を寄せ、一八六四年には自ら最初の艦船売却を行つてゐる。

グラバーは反幕派の諸藩が天皇の権限を復活させようとしてゐることを理解した。叛徒たちが政治的活動を強めるにつれて、グラバーは、彼らを助けることで、幕府による通商の締め付けが終わり、新政府がいやおうなく顧客になることを期待した。こうして一人のスコットランド人の商人魂が日本の発展に大きな役割を果たしたのである。

グラバーは、薩摩藩だけではなく、イギリス公使館の放火事件を起こすなど攘夷運動の中心として恐れられていた長州藩の伊藤博文や井上馨とも知り合いになつた。グラバーにとつて長州藩は、武器類の有力な顧客だった。薩長が互いに競争して武器を買い求めたのもグラバーにとつては有益だった。

一八六二年の生麦事件は、特にイギリス・薩摩・長州・幕府間のバランスを不安定なものにした。幕府は全ての責任を一外様大名に押し付けるわけにはいかず、かといつてイギリス海軍と戦うこともできなかった。幕府が立ち往生する中で、グラバーや他の外国人商人たちは戦争が避けら

れそうにないことを悟った。薩英戦争の際、開戦ぎりぎりまで薩摩の侍たちに協力したことで、彼は叛徒たちの味方として記憶されることになる。薩英戦争後、薩摩は新たなスケールでの再武装化の必要性を感じ、五代友厚がグラバーに百門の阿姆斯特朗砲を注文し、薩摩藩とグラバーの關係はますます親密になった。こうして一八六七年度の明治維新まで、グラバーにとつて武器が主要な取引品目となった。

グラバーが条約違反を侵してまで武器を調達するのをイギリス外交官たちは軽蔑もしたが、外交官の一人アーネスト・サトウだけは別だった。彼はグラバーが英国外務省よりもむしろ日本の政情をよく理解していることを知っていたからである。イギリス軍は、長州藩による外国船打ち払いの報復としてアメリカ、フランス、オランダとともに下関砲撃を行うが、結果は彼らの予想に反し薩摩と長州を接近させることとなった。薩摩藩同様、長州藩は敗北から近代化の教訓を学び、急いでイギリスから帰国した「長州五人組」の伊藤と井上、それに加えて木戸孝允が中心となってグラバーから武器を大量に買い求めた。

この「長州五人組」の国外密航にグラバーが一役買ったとしばしば考えられてきたが、実は彼らを手助けしたのはグラバーではなく、ジャーディン・マセソン商会横浜支店のガワーだった。彼らのイギリスへ密航は、日本が武士社

会の体系から帝国としてのそれへと方向転換を始める決定的な瞬間だった。

グラバーは、「薩摩一九人」と言われる薩摩藩の志士たちの留学には中心的な役割を果たした。薩摩藩の洋学教育機関、開成所の出身者を主なメンバーとする彼ら一行は、ヨーロッパに着くと薩英戦争で経験した以上のショックを受け、彼らの攘夷思想は霧のように消えた。最年少の長沢鼎は、アバディーンのグラバー家に寄宿し、ギムナジウムで優秀な成績を収めた。長沢がアバディーンに滞在中の一八六五年、彼は幕府のために作られた「オワリ号」という船の進水式を見ることになる。反幕派の少年の面倒を見る一方で、その敵である幕府に船を供給したグラバー一家の両面性は簡単には説明しがたい。

同年にパークスが駐日イギリス公使として赴任すると、グラバーは翌年パークスの薩摩藩訪問をアレンジする。グラバーは、三月に密かに結ばれた薩長同盟について知っており、反幕派の方にイギリス外務省の共感を向け、幕府を孤立させようとした。幕府を支援すべきか西南雄藩を支援すべきか揺れ動いていたパークスも、次第に西南雄藩支援に傾いていった。これが明治維新の直接的な布石となった。

グラバーの事業のもっとも皮肉的な結果の一つは、銃を輸入することで武士の武器としての刀の伝統に陰りをつ



のガワーだった。彼らのイギリスへ密航は、日本が武士社

くったことである。

## 第六章 刀剣時代の終焉

薩英戦争後、戦いの形態は刀を使つての接近戦から銃を使つての遠隔戦へと変わつて行つた。この近接的な白兵戦から遠目で見る遠隔戦の変化は、帝国が経験する一般的傾向だった。明治維新後十年も経たないうちに、刀という武器にこだわる日本人は少なくなつた。一八六五年から三年間だけでも一七万一、九三四丁のライフルが長崎に輸入され、グラバー商会は一番の交易者だつた。

アバディーンで日本のために最初に建造された艦船は、グラバーの長兄チャールズが経営するグラバー・ブラザーズ船舶仲介商会を通じて発注されたサツマという船で、一八六四年に進水した。その後、グラバーは、最も主要な三隻（鳳翔丸、上昇丸、雲揚丸）を諸藩に売却している。その中でも肥後藩に売却した上昇丸は、アバディーン造船所で作られた最も大きな艦船だった。これらの船は日本の帝国海軍の誕生を象徴するもので、グラバーの功績は、帝国の発展のためには強い軍隊が必要であるという富国強兵論を伝えたことである。

明治維新前、特に一八六五年には長州を初めとする諸藩への武器供与がピークに達したが、グラバーは反逆罪の危険を冒しながらこの商売をしていた。幕府による規制に違

輸入することで武士の武器としての刀の伝統に陰りをつ

反している上に、イギリスも公的にはまだ幕府の味方だったからである。しかし、一八六六年のパークスの薩摩藩訪問以降、イギリス人外交官たちはグラバーが侍との交渉の権威であることを認めざるをえなかつた。薩長同盟により孤立した幕府は、薩長が所有する武器の数に圧倒される形で、実際の戦いをせぬまま大政奉還し、一八六八年一月三日、王政復古の大号令により幕府の時代が公式に終わった。この時グラバーは約十年ぶりにアバディーンに一時帰国していた。彼は新政府になつても武器市場は続くだろうと踏んでいたが、皮肉なことに維新後三年の間に、海外貿易が標準化され、大阪や兵庫も開港したことで、長崎はそれまでの貿易港としての特異性を失い、脇に追いやられてしまつた。そして、グラバーの武器の取引は事実上終わった。

刀の時代の終わりは西郷隆盛の最期によつて決定的となる。新政府に不満を持つ志士たち、刀を携えた侍たちを率いた西郷は、西南戦争で敗北する。日本が西洋の戦法にすばやく切り替えたにもかかわらず、二〇世紀にはいるまで日本の帝国としての力はヨーロッパ諸国に注意を払われなかつた。また、一九一九年に第一次世界大戦終結のヴェルサイユ条約で、戦勝国と同等の扱いを要求して拒否された屈辱が日本の軍国主義的性格を強めるきっかけにもなつた。

## 第七章 維新前夜

一八六七年にグラバーがアバディーンに一時帰国する前、彼はイギリス政府が形態はどうであれ安定した政権を日本に求めていることを理解していた。パークスも維新が近づきつつあることを悟り、ゆるやかに幕府支援から反幕勢力の支援へと切り替えた。このタイミングでグラバーが日本を去ったのは奇妙に見える。この時期はちょうど英国でも帝国主義が見直されていた時期で、英国外務省は日本を植民地化するという野望は持っていなかったが、西洋に友好的な形で国際社会に広えてくれる日本政府——イギリスの立憲君主制をモデルとした政府——を必要としていた。これはグラバーが望んだことでもあった。

イギリスは一九世紀を通して世界のあちこちでフランスと帝国の覇権争いを繰り広げていた。日本においてフランス政府は政治レベルでも通商レベルでも幕府を支援してきたが、一八六五年にアマチュア日本通のモンブランがパリ万博で日本文化の紹介をするにあたり、將軍を差し置いて薩摩に接近する。グラバーとモンブランはライバルとなるが、二人とも自国の代表という自覚があった。

一八六〇年代のグラバーの活動で著しいのは、日本の近代化を推し進めた彼の任務である。西洋諸国の役人たちは、帝国主義は健全な文明化の産物であるという考えを日本で広め、グラバーもまた帝国主義イコール進歩とする教

育を受けてきた。日本が変革の時期にイギリスの帝国主義を好み、模倣したいと考えたのは偶然ではない。グラバーは日本の帝国主義、富国強兵政策を、少なくとも二〇世紀の始めまでは奨励し、自分が日本に新しい帝国主義を展させる機会を与えたことを誇りに思っていたに相違ない。故郷への一時帰国も彼が望んだ政治的安定を予想してことであつた。しかし、全てが順調というわけでは決してなかった。

## 第八章 転落への道

一八六八年一月までにはグラバーの反幕派の友人たちは、維新政府の要職についていた。しかし大名たちの権力が維新政府に接収されるや否や、多くの藩が武器の代金支払いを不履行にし、グラバーの資金運用の障害となった。

一八六七年グラバーの一時帰国のときまでに、グラバー商会は既に一五万ドルもの深刻な負債を負っていた。財務上の不安が彼の一時帰国の理由の一つである。アバディーンの家族、とくに兄のチャールズとジェイムズが経営するグラバー・ブラザーズ船舶仲立会社に援助とアドバイスを求めたのである。この時点ではまだ、グラバーは不動産を売却することで負債を完済することも可能であつたが、そうする代わりに彼は翌年に日本に戻ると自分を起業家・実業家に轉身させた。事態を打開するために、より大胆な策略

として高島炭鉱に目をつけたのである。しかし、負債と売

から融資を受けた。半国営のオランダ貿易会社とのこのよ



は、帝國主義は健全な文明の産物であるといふ。日本で広め、グラバーもまた帝國主義イコール進歩とする教

として高島炭鋳に目をつけたのである。しかし、負債と売れ残りの武器を抱えた上でリスクの大きな炭鋳経営に乗り出す判断は間違っていた。

日本に再入国後、武器の売却が大きな利益をもたらしていた時代が過ぎ去ったことを悟ったグラバーは、炭鋳経営と小菅造船台の建設に力を注いだ。特に一八六九年一月に建設が始まった造船台は、日本が外国の船を買わなくても自分たちで船を建造できるようになることを意味しており、その年のうちに明治政府が二三万ドルで購入するなど、グラバーの偉大な業績の一つとなった。

高島炭鋳の開発のために、彼はあらたに一五万ドルの資金を借り入れた。石炭が予定通りに産出されれば、二年で黒字になると踏んでの賭けであった。高島の石炭が予想よりも質がいいことが証明されると、さつそくP&O社が月々壱千トンの定期購入を申し込み、アメリカやロシアの海軍も購入を約束した。しかしこれらの需要に應えるだけの石炭を産出するには炭鋳に投資をし続けねばならなかった。炭鋳労働者は最大で五千人にも上った。彼らは危険な環境で一日八時間、月二〇日間働いた。石炭の供給を増やすため、グラバーはジャーディン・マセソン商会から更に借金を重ねた。一八六九年から翌年にかけて、グラバーの過剰投資は悪循環に陥り、ジャーディン・マセソン商会に対して時間稼ぎをするために金利の低いオランダ貿易会社

家に転身させた。事態を打開するために、より大胆な策略

から融資を受けた。半国営のオランダ貿易会社とのこのよ

うな関係はイギリスの貿易協定に反するものだった。財政の悪化にも関わらず、グラバーは炭鋳経営にかたくなまでの信念を抱いていた。操業前は一〇二百トンから五百トンの産出を見込んでいた炭鋳は、見込み違いが続き、グラバーは炭鋳労働者の数や賃金を削減するなどしたが、この頃には首が回らなくなっていた。グラバーはジャーディン・マセソン商会に炭鋳の利権の四分の一を抵当に更に三万ドルの融資を求めた。しかしジャーディン・マセソン商会のウィットタルは炭鋳が既にオランダ貿易会社からの融資の担保になっている事実を突き止めた。ここにきて忍耐強くグラバーに融資を続けてきたジャーディン・マセソン商会は態度を硬化させ、債務の返済を強く求めるとともにグラバー商会の会計検査を行った。ジャーディン・マセソン商会に対する負債をオランダ貿易会社の融資で支払うというグラバーの試みは失敗した。

オランダ貿易会社との新たな合意書で、炭鋳の全ての利権が抵当に入り、オランダ貿易会社が炭鋳の事実上の経営者となると、グラバーの炭鋳経営は終わった。オランダ貿易会社が抵当権執行の意思を表明し、グラバーの債権者であるC・J・フォーブスが法的措置に訴えると、その他の債権者たちもそれに続き、ついにグラバー商会は破産を宣告された。オランダ貿易会社は炭鋳をさらに拡張して



いくつもりでしたので、九月一六日の債権者会議では、炭鉱を含めたグラバーの資産を清算するよりも、炭鉱は残して操業し続けた方が補償金を搾り取りやすいことを他の債権者たちに訴えた。この聴聞会でグラバーの負債額は六八万一、五七〇ドルにのぼることが明らかになった。しかし、借金返済のために炭鉱経営に引き続き携わる意思があるか尋ねられると、グラバーは喜んで協力を申し出た。

オランダ貿易会社はグラバーを月額二百ドルの給与で雇い、グラバーはもはや炭鉱経営が自己の利益にはならないことを承知の上で島の別荘で寝泊りしながら精力的に働いた。このグラバーの労働倫理が、三菱の設立者である岩崎弥太郎の目に留まることとなる。

破産はグラバーが自分の私生活に目を向けるきっかけともなった。破産による羞恥心が故郷の家族から距離をとることもなったが、代わりに日本で家庭を持つのである。

グラバーがやがて彼の妻となる女性、ツルを紹介されたのはおそらく一八六九年で、このときツルは一七歳、既に一児の母であった。居留地のグラバーの家に移り住んでからも影のような存在であったが、彼女の存在がグラバーの借金返済の励みとなった。グラバーは若いときには何人かの遊女と関係を持っており、一八六〇年九月には広永園という娘と一度結婚をし、梅吉という長男をもうけた。梅吉は四ヶ月で夭逝した。グラバーの二番目の子は丁度彼がツル

との居を構えようとしていた頃に、加賀マキという別の女性に産ませた新三郎である。その後一八七六年ツルとの間に女の子が生まれ、ツルがこれ以上の妊娠は無理だということがわかると、グラバーは加賀マキと新三郎を探し出して新三郎を養子とし、富三郎と改名させた上で自分とツルのもとで育てた。

## 第九章 造幣事業への貢献

一八七一年時点で日本の通貨はまだメキシコドルとの交換制であった。明治政府は維新のころから造幣局開設の案を持ち出してはいたが、計画が具体的になったのは一八七〇年の終わりであった。それよりずっと以前、グラバーは、香港の造幣局が閉鎖するのに伴いジャーディン・マセソン商会に造幣機械の購入を持ちかけた。しかしジャーディン・マセソン商会のエドワード・ウィットルは取引にかかるコストを知ると計画から手を引いた。この時点でグラバーは自らの破産を経てまだ高島炭鉱に縛り付けられており、炭鉱に残って負債を返済する以外の選択肢はなかった。しかし彼は香港のオリエンタル・バンクを通じて造幣機械と貨幣用の金属を輸入した。造幣機械の販売の斡旋は全くもうけにはならなかったが、新政府とのコネをつなぎとめるものであった。

一八七二年夏までには、高島の第二立坑が最初の計画に



四ヶ月で天逝した。グラバーの二番目の子は丁度彼がツル

近い量の炭坑を産出するようになり、グラバーは破産から二年で負債の四分の三を返済した。更にその年の終わりまでには明治政府が版籍奉還を実施し、大名に土地を返納するように要求したため、グラバーは炭坑の使用料を肥前に支払う必要がなくなつた。一八七三年の秋ごろまでにはついに炭坑は黒字となつた。このグラバーのヘラクレスの努力こそが、後の彼と三菱との關係を引き寄せたのである。

一八七四年に維新政府がオランダ貿易会社から四〇万ドルで高島炭坑を買収し、その数カ月後、政府は炭坑を後藤象二郎に払い下げた。後藤は炭坑夫たちの勤務日を月二〇日から二六日に増やし、自らは東京に引きこもつたのでしばしば炭坑夫の憎しみの対象となつた。後藤の冷酷無情な経営は、一八七八年の大規模な暴動へとつながつた。その後炭坑の所有権は、一八八一年三月に後藤から土佐藩の岩崎弥太郎に渡る。岩崎は当時政府の援助を得て急速に拡大していた三菱海運会社のトップであり、グラバーにとつては、一八七〇年代半ば以降、伊藤に代わつて最も頼りになる友となつた。グラバーは岩崎の要請で再び炭坑の経営に携わる。高島炭坑は一八八六年に最終的に閉山された。岩崎は一八七六年に、グラバーに対して三菱の顧問として東京に来ることを勧めたが、そうすることはグラバーが長崎を去ることだった。

一八七二年夏までには、高島の第二立坑が最初の計画に

## 第十章 移り行く侍像

反幕府の狼煙を上げ、グラバーの助成で天皇制復古を実現した西南諸藩の侍たちは謀反人であり革命家であつたが、謀反・反逆と革命は、場合によっては、人権の主張から国体の変化まで様々な意味を孕む。グラバーの助成で実現したのは「自由貿易」なのか、それとも「正義と平等」を謳う新しい時代なのか。

日本の天皇制復古の特徴を一言で言えば、排他的特権的階級制度からエリート社会・実力社会への転換である。フランス革命の基本理念としてのその思想は、やがてアバディーンに飛来し、その環境で育つたグラバーが日本に伝えたものだ。その意味で、グラバーは革命家であつた。ヴィクトリア女王時代のイギリスでは、勤勉さが美德として説かれ、社会的昇進の機会を約束したが、実際にはそれは極めて限られていたように、天皇制復古後の日本でも、権力の座に就くのはたいがい武士階級であり、グラバーもそれを手助けした。平等という観点からすれば、明治政府は体制反逆の精神をほとんど示していない。

民族単一主義を掲げる日本国が「アジアの辺境に新しいヨーロッパ的帝国樹立」を目指して「文明開化」の旗印の下、イギリスを手本にした帝国議会の設立に向けて欧米に使節を差し向けたとき、グラバーは蔭からこれを支援し、一八七一年、啓蒙主義の頭脳集団である岩倉使節団の派遣

を支持した。

一八七〇年代には、明治政府に不満を持つ士族の反乱が相次いで勃発する。そのため政治的集会の取締りが厳しくなり、一八八一年には悪名高い憲兵隊が組織され、一九四五年まで横暴な権力主義的秘密組織として活躍することになる。その間、海軍の軍力が増大し、「愛国党」に連なる人々はヨーロッパ的啓蒙主義と功利主義を謳歌し、福沢諭吉はヨーロッパ的政治思想の輸入に躍起となり、一八八二年には『時事新報』を創刊して、慶応義塾には英国最良の思想家集団が集った。

一八八〇年代半ばには「明治保守体制」は次第に「明治独裁体制」へと変化していくが、その間、新しい社会主義の思想が芽生え始めていた。一八七三年に森有礼によって設立された「明六社」という初めはごく小さな頭脳集団であったものが、福沢や帝国大学総長となる加藤弘之、西周らに支持されて、社会労働党として大きな勢力へと発展していく。高島炭鉱労働争議の最中に経営者であったグラバーは、啓蒙主義・文明開化から社会主義への成長・発展をどう感じていたであろうか。しかし、グラバーの頭を悩ませたことは他にもあった。日本の軍国化と、行く当てのない、価値を認められない士族の誇りとの行き先であった。

## 第十一章 宝 島

この章では、スコットランドが生んだ歴史冒険小説家 R・L・ステイヴンソンとの関わりで、グラバーの日本における活動が述べられる。グラバーが高島の別荘に住みこみ、借金の返済にしゃかりきになっていた頃、ステイヴンソンは東洋のこの神秘的な国の研究にのめり込んでいた。二人の人物には何ら共通点はないように思われるが、しかし、二人が紡いだ物語は密接に絡まりあっていた。

ステイヴンソンは、体の弱さのため、結局、日本に行けなかった。彼が書いた太平洋の南の島の物語は、グラバーを不愉快にするような痛烈な皮肉に染まっていたけれど、日本列島は彼の想像力を刺激し続け、とりわけ、伊藤や井上や彼らの同志たちに新風を吹き込み、新しい政治体制を築く切っ掛けを与えた世代の人々（例えば、吉田松陰）に、彼は魅了されていた。

ステイヴンソンの一族は代々技術職人で、日本に灯台を伝えることになった。スコットランドでは、科学的光明が進歩の証しであり、日本では、文明は「文化の明かり」のことで、「明治」は文字通り「明るい政治組織・統治」の意味である。沿岸警備隊員の父を持つグラバーもまた、灯台には無縁ではなかった。

日米修好通商条約では、日本近郊の海域に灯台を作ることでその第十一条に定められているが、その設計技師とし



て来日したのがリチャード・ブラントンである。彼はステイヴンソン一家と組んで灯台設計技師になる前は鉄道技師をしていたが、グラバーの推挙により外務省經由で採用され、一八八六年に来日して以来、たった六年間で二六もの灯台建設に携わった。

哲学を基盤にした学際的・一般的教育体系の洗礼を受けたステイヴンソンは、彼の歴史小説に似た趣向の吉田松陰論を書いた。これは国粹主義こそ抵抗のための根源力であり、松陰をその典型的権化と見做す考え方を披露したものであったが、攘夷の侍としての誇りについては全く沈黙していた。一八六二年を実際に体験したグラバーには、それは見過ごせないものであっただろう。天皇制復古後の日本の二大理想「独立独行」や「国際化」と、イングラランドとの合併後のスコットランド事情を絶えず結び付けて考えていたステイヴンソンのメッセージは、「反逆賛成」、「反帝国主義」であったが、グラバーのそれは、「反逆賛成」、「反帝国主義」であった。ステイヴンソンは帝国主義と組討ちし、実利主義者であるグラバーは日本に啓蒙主義を仲介・斡旋したことで自己啓発者として成功していた。グラバーは「西洋式の」灯台を日本に初めて供給した人物であった。

## 第十二章 西洋人の相談役

妻ツルと養子に迎えた（加賀マキに生ませた）息子新三

た。日本修女道徳多終てい。日本辺交の消垣は火をそいそとがその第十一条に定められているが、その設計技師とし

郎（後に富三郎）と生まれたばかり娘ハナを連れて東京へ転居したグラバーは、東京と長崎を往復する多忙ではあったが、社主の岩崎よりも二〇パーセントも多額の俸給を支給されて経済的には恵まれた人生を送ることになる。これまでの働き尽くめの生活を卒業して、グラバーは社交を重んじ、洗練された趣味とスポーツに興じるようになるが、しかしこの間、長らく仕事のパートナーを務めた敬愛する長兄チャールズと次兄ウィリアム、そして父の死去など、いくつかの不幸な出来事が度重なって起きてもいる。故郷から遠く離れた異国に住み、数名の肉親に先立たれたグラバーは、故郷アバディーンへの郷愁の念それ自体を失いかけていた。

三菱の社主岩崎がグラバーに求めていたものは、国際的規模における武器、船舶、貿易の専門家としての彼の力量であった。また、後藤象二郎に払い下げられ、経営が悪化していた高島炭鉱紛争の火消し役として期待されてもいた。一八八一年の春、高島炭鉱は三菱の経営に委ねられ、四二歳という人生真つ盛りのグラバーは、再び長崎の舞台に登場することになった。この間、「極めて聞こえにくい」ものではあったが、炭鉱に電線を引いたり、長崎で蒸気機関車を日本で始めて走らせたり、またダイナマイトを使用したりして、故国スコットランドの科学技術を示したりした。

グラバーが長崎駐在ポルトガル領事就任（一八八一—八七年）を引き受けたのは、息子新三郎が正規の教育を受けられるようにとの父親としての計らいが働いていた。政局が混乱する中、伊藤博文はその国の憲法を学ぶためプロイセンに向かい、その留守を狙って対立派の筆頭大隈重信は立憲改進黨を設立し、プロイセン的絶対専制主義に対するイギリス的政党政治を掲げた。

一八八二年七月二十八日、トマスとアレックスのグラバー兄弟は、未だ辺境地帯であったアメリカのオレゴン州とワシントン州での土地投機の可能性を求めて、約一年に及ぶ旅へ出立して、関係者と家族の者たちを驚かせた。アレックスの子孫が現在アメリカに永住する切っ掛けになった出来事であるが、結局、グラバーその人はしばし農園生活の妙味を楽しんだ後、自分を日本に呼び返す声に抵抗できずに、不動産に投資した利権のすべてをアレックスに譲って、一八八三年三月に帰国した。

その間、日本の政情は悪化していた。三菱の創始者である岩崎弥太郎は、一八八五年二月六日に癌のため不帰の客となり、一七歳年下の、ニューヨークで教育を受けた弟、岩崎弥之助が経営権を引き継ぎ、グラバーを右腕として社内留まらせた。また、同年、伊藤が初代総理大臣に任命され、昔グラバーが支援し、日本の権力の中核にある人々が常連の客として、東京・麻布の屋敷にグラバーの意見を

拝聴するために訪ねて来るのを自慢できる立場になった。

### 第十三章 ビールと名誉

オランダ人を通じて日本に紹介されたビールは、日本人の嗜好に合ったが、当初日本で飲まれていたビールはすべて輸入品であった。一八六九年、アメリカ人ウィリアム・コーブランドが横浜に開設したビール酒造所を、一八八五年にグラバーは、日本の内務省に雇用されていたイギリス人、M・カークウッドと資本を出し合い、買収した。必要な資本の大半を株券として日本の在留人社会から調達し、グラバーは、同年七月に「ジャパン・ブルワリー・カンパニー」を設立して、常務取締役就任した。

酒造会社設立に関わっていたとき、アバディーンのプロレーヘッド・ハウスでは八〇歳の母が永遠の眠りに就いた。当時同居していた娘マーサには、グラバーから日本に来て自分の許に身を寄せるようにという誘いの手紙が届いたはずで、マーサ一家は結局それに沿う決断をした。日本でのマーサは、姪のハナを西洋風の礼儀作法を身につけた令嬢に育てるべく尽力することになる。

「ジャパン・ブルワリー・カンパニー」が醸成したビールが一八八八年五月に初めて発売され、明治屋社長、磯野計の助力を得て、新ビールが外来のビールより安価な値段で販売された。「麒麟」と名付けられたラガー・ビールは



が常連の客として、東京・麻布の屋敷にグラバーの意見を

で販売された、「麒麟」と名付けられたラダー・ビールは

大成功を収め、グラバーは欣喜雀躍した。

日本の政情に対して常に強い関心を抱き続けたグラバーは、「鹿鳴館」の外国人名誉書記に任命される。「鹿鳴館」は国際交流の場を提供し、東洋が西洋に出会うため、また日本の西洋化を促進する場とするために、イギリス人建築家によってヴィクトリア王朝風様式を採用して、一八八三年日比谷地区に建設された迎賓館である。「鹿鳴館」には二面性があり、上流階級の夫人たちが西洋化のために日本の伝統的な着物の美を打ち捨てて、西洋風のドレスに身を包む例に見られるような、日本古来の大切な伝統と社会風習を遺棄するという批判を招いた。グラバーがそれに対してどのような気持ちであったかは分らないが、政府はあまりに性急に先へ先へと物事を推し進めてしまったのではという懸念が人々に生まれ、やがて鹿鳴館は終焉へと向かい、外国のものなら善し悪しに関わらず何でも取り入れようとする当時の姿勢を見直す最初の切っ掛けとなった。

一八八九年、伊藤が構想した新憲法が公布され、翌年二院制を採用した国会が開設された。投票権を有する者がたとえ国民の一〇％に限定されていたとしても、それは正しい方向への第一歩であった。今や日本滞在が三〇年に及ぶグラバーにとつても、第二の故国である日本がこれまでに成し遂げてきた発展は瞠目すべきものであった。日本は大国となるべきレールに乗っかっているように見えた

が、ただ一つ、屈辱の象徴である治外法権を認めた条約を撤廃しなければ、国際社会において日本の正式な認知は得られなかった。日本の軍事力は、陸軍・海軍を問わず充実し、産業面でも大きく成長していた。

この間、グラバーは三菱の顧問としてコンサルタント業務に携わる傍ら、「ジャパン・ブルワリー・カンパニー」を経営し、一八九一年には同社の社長に就任した。グラバーの屋敷は、東京でも長崎でも、進歩的な日本人と外国人が自由に出会って語り合える集いの場となっていた。グラバーの気掛かりは、韓国に対する征韓論者の態度であった。娘のハナは結婚後すぐに日本の新しく開かれた領土である韓国へ移住し、一九三八年に亡くなるまでその地に住んだ。しかし、第二次大戦中に富三郎に降りかかった「混血児」としての恐ろしい運命を思えば、それは賢明な選択だったかもしれない。

#### 第十四章 帝国の辺境にて（二）——日本

麒麟麦酒造が三菱傘下に入り、退職金として高額の三千元（当時二百円もあれば、都心部に土地付一戸建てが購入できた）を支給され、悠々自適の余生生活に入ったグラバーと、イギリス人外交官アーネスト・サトウとの交流について書かれている。

一八九四年、日本は朝鮮半島の領土問題を争って清国と

戦争に突入した。その結果、日本が目覚ましい勝利を収めたことで、西洋諸国は極東に誕生した新しい強国に眼を向け始めた。以前から日本海軍と利害関係が深く、その育成発展について日本政府に助言をして来たグラバーは、日本海軍の勝利には歓喜したに違いない。後にこの戦争に「隠れた奉仕」をしたことで、明治天皇から褒賞されている。

国威の発揚となった日清戦争が一八九五年四月に終了したとき、凱旋帰国した日本帝国海軍は今や近代的に編成された艦員を載せて、かつてグラバーが調達した船を使用していた。四〇年前には自国が植民地化の対象とされかねなかった日本が、今では他国を植民地化する強国へと発展していた。勝ち戦は日本の地位の向上に繋がり、一八九九年には、それまで忌み嫌われてきた治外法権の条例がイギリスとの合意に基づいてめでたく撤廃されることになった。

その間、グラバーとアーネスト・サトウは一致協力して、イギリスと日本とがより深く理解しあえるように主張し、様々な手立てを利用してそれを実現しようとしていた。その際に、二人の広い人脈が幸いし、イギリス側の代表であるスペンサー卿を味方に引き入れるのに成功した。また、二人と協力して日英同盟の締結を導いたもう一人の立役者は、一八六九年から一九〇二年まで英国日本領事館で働き、退職後ロンドン大学キングズ・コレッジで日本文化教授となったジョゼフ・ヘンリー・ロングフォードであ

る。この三人が結束してロシアの脅威を説き、日本の協力があつて初めてイギリスは、シンガポールと香港を領有できるとする現実主義を力説して、日英関係を強固なものとした。

一九〇四年二月一日に開戦の火蓋が切つて落とされた日露戦争では、かつてグラバーが世話した鳳翔丸と上昇丸が実戦において活躍した。日本帝国海軍は今やロシアのそれを追い越し、国内事情はますます権威主義的独裁的になり、国の政策のいかなる局面をも批判することは危険なことであつた。日本国の目的は、文明開化の使命よりは、軍事力の誇示へと向かつているように思われた。

## 第十五章 『蝶々夫人』 顛末記

グラバーの家族とプッチーニ作のオペラ『蝶々夫人』との関連について、その顛末が述べられている。悲劇の起源は、安政の不平等条約にある。当時、西洋人は特権的に日本の女性との便宜的な結婚が普通のことであつた。

グラバーは、山村ツル（または淡路屋ツル）と結婚式らしき儀式を行つたらしいが、二人の婚姻の記録は、日本側にも、イギリスの領事館の記録簿にもない。その後二人は伴侶として三〇年以上もの歳月を共にすることになる。その間、トマスは常にツルに誠実だったわけではないが、二人の間には何らかの確かな絆が存在した。ツルが、夫のい



で働き、退職後ロンドン大学キングズ・コレッジで日本文学教授となったジョゼフ・ヘンリー・ロングフォードであ

くつかあったはずの情事の一つに耐えたのは明らかで、その情事こそが後に、半ば悲劇で終わった蝶々夫人・グラバー物語の構想の土台となった。

一八七〇年に入つて間もなく、トマスはある日本人女性と情交し、彼女は身籠つた。その女性、加賀マキは一二月八日に長崎で男児を産み落とした。トマスは新三郎が自分の子であると認め、こういう状況で通常期待される以上の金銭と愛情とを惜しみなく注いだ。この男児の出生が「蝶々夫人」物語の端緒を開く切っ掛けになった。

トマスとツルの長女ハナは、一八七六年八月八日に誕生した。一方、加賀マキがこの世に送り出したグラバーの六歳の息子は富三郎と改名され、当面は非公式ではあったが、トマスとツルの養子としてグラバー邸に引き取られていた。なぜマキが愛息を手放したかについては、恐らく、男児に恵まれなかったグラバーが仕組んだ計略だったのだろう。愛息を手渡すように強いられたマキは自殺を図つたという。この劇的な筋書きが、数年後に発表された小説であり、演劇であり、オペラである『蝶々夫人』の、悲劇的な結末のヒントとなったのはほぼ確実である。この自殺未遂の一件は長年語り継がれてきたが、唯一確固たる事実として、マキは死なずに生き残つた。最近までその存在が全く知られなかった加賀マキのような女性が、恐らくは、「蝶々夫人」の実在したモデルなのかも知れない。

の間、トマスは常にツルに言及し、マキの存在を暗示し、二人の間には何らかの確かな絆が存在した。ツルが、夫のい

一八八五年の夏、フランスの戦艦が長崎に寄港した。艦上には、後日、ピエール・ロチという筆名で知られるようになる、三五歳のジュリアン・マリー・ヴォード大尉が乗り組んでいた。ロチは、所属艦隊がしばらく長崎に寄留したその夏、多くの先輩たちに倣つて日本人の長崎「妻」を持った。長崎と自分との「結婚話」について綴つたロチの印象記が、蝶々夫人の神話の発端となり、グラバー一家にも間接的な影響を与えることになる。

一八九三年にフランスで、ピエール・ロチが小説『お菊さん』を上梓した。『お菊さん』は、フランス海軍士官の長崎での一夏の出来事を自叙伝風に綴つたもので、八年前の、ロチ自身の長崎における日本人妻とのかりそめの体験を基にしていた。作品に読まれる通り、ロチは人種的偏見をあからさまにし、悲劇的結末とは無縁である。小説の最後は、置き去りにされたお菊さんが士官にもらつた金貨を小さな槌で打ちつけ、本物かどうか確かめている場面で終わっている。彼の小説において幻滅を感じた者がいたとすれば、それはフランス人男性のほうであり、日本人の幼な妻ではなかった。

一八九八年にはジョン・ルーサー・ロングが小説『蝶々夫人』をアメリカの『センチユリー』誌に発表した。ロング自身は日本を訪れたことがなかった。彼の小説は五年前に出版されたピエール・ロチの『お菊さん』の影響を受け

て書かれたのは明らかであった。しかしこれらの二作品には筋書きの上で決定的な違いがあった。ロングの小説は蝶々夫人の自殺で幕を閉じていた。東西の出会いが幻滅に等しいとするピエール・ロチの主題に、この自殺という重大なテーマを付け加えて小説が書かれていること自体、ロングが『お菊さん』の筋立てに加賀マキとグラバーと覚しい男女の人生ドラマを重ねて不滅の女主人公を生み出したことを物語っている。

この小説が書かれるに当たっては、他の影響もあった。ロングの姉が一八九二年に住むようになった長崎の東山手から大浦川を隔てた南山手にグラバー邸があった。彼女は一八九七年にフィラデルフィアに帰郷した折、作家であった弟に、長崎時代に耳にした、アメリカの海軍士官に棄てられた「妻」、蝶々の話を聞かせた。彼女は他にも長崎で見聞した様々な体験談を語った。ロングはすっかり魅了され、その晩床に就かず、朝までペンを走らせた。その翌年出版されたのが小説『蝶々夫人』である。ロングの後年の述懐によれば、小説は、数年前に長崎で実際にあった出来事として姉から聞いた話を土台にして書き上げたものだが、そこに描かれた自殺劇は実は未遂に終わっているという。確かに、ロングの小説には複数の元になる話が認められるが、彼がグラバーと加賀マキとの人生のドラマを基盤にして『蝶々夫人』のクライマックスを書き上げた可能性

はきわめて高い。

一方、胃癌を病んでいた妻ツルは、夫と三二年の歳月を共にした後、初孫の誕生を知ってまもなく他界した。ツルの葬儀は盛大に行われ、遺骸は長崎の太平寺に葬られた。墓石に彫られた彼女の家の家紋は「蝶」であった。

一九〇〇年、ロンドンを訪問中のジャコモ・プッチーニが、デューク・オブ・ヨーク劇場で上演された芝居『蝶々夫人』を観劇した。それは、ジョン・ルーサー・ロングの小説を戯曲化したものを、アメリカ人デービッド・ベラスコが演出した出し物であった。プッチーニはこの芝居にすっかり魅せられ、この物語を主題にしたオペラの執筆を思い立った。彼は、一九〇二年、世界で最も有名な歌劇の一つに数えられる作品を書き上げた。富三郎の生みの親、加賀マキがこの世を去ったのは、一九〇五年のことである。彼女の存在が恐らくそのインスピレーションとなって創作されたオペラは、当時絶賛を博していた。

結局、著者が求めてきた具体的な関係は、蜃気楼のようなものであった。それは初めからわかりきったことであった。暗澹とした経済状況の中での性行為は、何らかの叙情的甘味料がない限り直視するのは難しかった。

## 第十六章 文明開化

一八九七年に娘ハナが結婚して家を離れたこともあつ



れるが、彼がグラバーと加賀マキとの人生のドラマを基盤にして『蝶々夫人』のクライマックスを書き上げた可能性

で、グラバーとツルの視線は、親密さを深める富三郎と中野ワカに注がれるようになる。ワカは日本人女性とイギリス人商人の間に生まれた美しい娘で、正式にトマスの養女に迎えられる。

二人の結婚式は一八九九年六月に長崎で行われる予定であったが、そのしばらく前からツルは胃癌を患っていた。彼女の死は周囲の予想より早く、三月二三日に突然訪れたが、朝鮮で生まれた初孫の誕生を知った後に他界した。英字紙がツルの逝去を報じるに当たって、彼女を「レディ・ツル」と呼称したことも、在留人社会におけるグラバー夫妻の名声を象徴していた。その間、トマスの兄弟たちが亡くなっていた。マーサが一九〇三年三月二〇日に、アルフレッドがスコットランドに帰国する途中に香港で一九〇四年五月一八日に死去した。

富三郎は叔父アルフレッドに協力して、日本と西洋との友好と相互理解の推進を目的とする団体、内外倶楽部を長崎の地に創設した。六〇歳代に入ったグラバーは、ツルが亡くなり、富三郎が無事結婚すると、そこを終の棲家にするつもりで、東京麻布の屋敷に引き移った。

富三郎は痩せて弱弱しい風采の少年であったが、一八八一年、アメリカ人宣教師ロング夫妻によって長崎に創立されたばかりの「鎮西学院」に入学した。「トミー」は一期生として入学した当初は優秀な学生で、トマス・

一八九七年に娘ハナが結婚して家を離れたこともあつ

グラバーの息子として目立った存在だったに違いない。一八八四年の秋、グラバーは息子に中等教育を授けるために、華族のための学校、学習院に入学させた。これは彼が息子に対して惜しみない愛情を注いでいたことを表す一つの例である。トミーは岩崎弥太郎の自邸から通学した。

学習院での四年間の中等教育を終えると、次に彼を待っていたのは、大学進学であった。その年、アメリカへ渡ると彼はペンシルバニア州のフィラデルフィア大学に入学した。フィラデルフィアには当時弁護士で作家のジョン・ルーサー・ロングが住んでいた。ロングの姉サラ・ジェーンの結婚した相手が、数年前に富三郎が学んだ長崎の鎮西学院に奉職する宣教師で、後に校長となるアーヴィン・コレルであった。

アメリカから帰国後の一八九五年、富三郎は叔父アルフレッドが勤めるホーム・リンガー商会に就職した。その後四五年間をこの商会に籍を置くことになる。富三郎は愛国的で、日本の軍国的国粹主義的雰囲気好み、国の帝国主義的戦争を熱烈に支持した。富三郎が独自に成し遂げた二つの業績は、『日本西部及び南部魚類図譜』の作成と、叔母マーサが他界した一九〇三年に父方の親類と縁の地を訪ねてアバディーンに渡った時に、長崎漁業汽船会社の常務取締役として、アバディーンの造船所に日本で最初の蒸気機関で運航するトロール船の発注という重要な商談をま

て書かれたのは明らかであった。しかしこれらの二作品には筋書きの上で決定的な違いがあった。ロングの小説は蝶々夫人の自殺で幕を閉じていた。東西の出会いはいは幻滅に等しいとするピエール・ロチの主題に、この自殺という重大なテーマを付け加えて小説が書かれていること自体、ロングが『お菊さん』の筋立てに加賀マキとグラバーと覚しい男女の人生ドラマを重ねて不滅の女主人公を生み出したことを物語っている。

この小説が書かれるに当たっては、他の影響もあつた。ロングの姉が一八九二年に住むようになった長崎の東山手から大浦川を隔てた南山手にグラバー邸があつた。彼女は一八九七年にフィラデルフィアに帰郷した折、作家であつた弟に、長崎時代に耳にした、アメリカの海軍士官に棄てられた「妻」、蝶さんの話を聞かせた。彼女は他にも長崎で見聞した様々な体験談を語つた。ロングはすっかり魅了され、その晩床に就かず、朝までペンを走らせた。その翌年出版されたのが小説『蝶々夫人』である。ロングの後年の述懐によれば、小説は、数年前に長崎で実際にあつた出来事として姉から聞いた話を土台にして書き上げたものだが、そこに描かれた自殺劇は実は未遂に終わつてゐるといふ。確かに、ロングの小説には複数の元になる話が認められるが、彼がグラバーと加賀マキとの人生のドラマを基盤にして『蝶々夫人』のクライマックスを書き上げた可能性

はきわめて高い。

一方、胃癌を病んでいた妻ツルは、夫と三二年の歳月を共にした後、初孫の誕生を知つてまもなく他界した。ツルの葬儀は盛大に行われ、遺骸は長崎の太平寺に葬られた。墓石に彫られた彼女の實家の家紋は「蝶」であつた。

一九〇〇年、ロンドンを訪問中のジャコモ・プッチーニが、デューク・オブ・ヨーク劇場で上演された芝居『蝶々夫人』を観劇した。それは、ジョン・ルーサー・ロングの小説を戯曲化したものを、アメリカ人デービッド・ベラスコが演出した出し物であつた。プッチーニはこの芝居にすっかり魅せられ、この物語を主題にしたオペラの執筆を思い立つた。彼は、一九〇二年、世界で最も有名な歌劇の一つに数えられる作品を書き上げた。富三郎の生みの親、加賀マキがこの世を去つたのは、一九〇五年のことである。彼女の存在が恐らくそのインスピレーションとなつて創作されたオペラは、当時絶賛を博していた。

結局、著者が求めてきた具体的な関係は、蜃気楼のようなものであつた。それは初めからわかりきつたことであつた。暗澹とした経済状況の中での性行為は、何らかの叙情的甘味料がない限り直視するのは難しかった。

## 第十六章 文明開化

一八九七年に娘ハナが結婚して家を離れたこともあつ



にして『蝶々夫人』のクライマックスを書き上げた可能性

て、グラバーとツルの視線は、親密さを深める富三郎と中野ワカに注がれるようになる。ワカは日本人女性とイギリス人商人の間に生まれた美しい娘で、正式にトマスの養女に迎えられていた。

二人の結婚式は一八九九年六月に長崎で行われる予定であったが、そのしばらく前からツルは胃癌を患っていた。彼女の死は周囲の予想より早く、三月二三日に突然訪れたが、朝鮮で生まれた初孫の誕生を知った後に他界した。英字紙がツルの逝去を報じるに当たって、彼女を「レディ・ツル」と呼称したことも、在留人社会におけるグラバー夫妻の名声を象徴していた。その間、トマスの兄弟たちが亡くなっていた。マーサが一九〇三年三月二〇日に、アルフレッドがスコットランドに帰国する途中に香港で一九〇四年五月一八日に死去した。

富三郎は叔父アルフレッドに協力して、日本と西洋との友好と相互理解の推進を目的とする団体、内外倶楽部を長崎の地に創設した。六〇歳代に入ったグラバーは、ツルが亡くなり、富三郎が無事結婚すると、そこを終の棲家にするつもりで、東京麻布の屋敷に引き移った。

富三郎は瘦せて弱弱しい風采の少年であったが、一八八一年、アメリカ人宣教師ロング夫妻によって長崎に創立されたばかりの「鎮西学院」に入学した。「トミー」は一期生として入学した当初は優秀な学生で、トマス・

一八九七年に娘ハナが結婚して家を離れたこともあ

グラバーの息子として目立った存在だったに違いない。一八八四年の秋、グラバーは息子に中等教育を授けるために、華族のための学校、学習院に入学させた。これは彼が息子に対して惜しみない愛情を注いでいたことを表す一つの例である。トミーは岩崎弥太郎の自邸から通学した。

学習院での四年間の中等教育を終えると、次に彼を待つていたのは、大学進学であった。その年、アメリカへ渡ると彼はペンシルバニア州のフィラデルフィア大学に入学した。フィラデルフィアには当時弁護士で作家のジョン・ルーサー・ロングが住んでいた。ロングの姉サラ・ジェーンの結婚した相手が、数年前に富三郎が学んだ長崎の鎮西学院に奉職する宣教師で、後に校長となるアーヴィン・コレルであった。

アメリカから帰国後の一八九五年、富三郎は叔父アルフレッドが勤めるホーム・リンガー商会に就職した。その後四五年間をこの商会に籍を置くことになる。富三郎は愛国的で、日本の軍国的国粋主義的雰囲気好み、国の帝国主義的戦争を熱烈に支持した。富三郎が独自に成し遂げた二つの業績は、『日本西部及び南部魚類図譜』の作成と、叔母マーサが他界した一九〇三年に父方の親類と縁ゆかりの地を訪ねてアバディーンに渡った時に、長崎漁業汽船会社の常務取締役として、アバディーンアバディーンの造船所に日本で最初の蒸気機関で運航するトロール船の発注という重要な商談をま

とめたことである。

グラバーの娘ハナは、東京と横浜に居を構えていた父の許で育ち、主に東京で教育を受けた。彼女は日本よりも西洋風の生活様式を好み、父親似の外向的な、そして聡明な娘であった。一八九七年一月二六日に日本のホーム・リンガー商会に勤めていたロンドン生まれのイギリス人、ウォルター・ゴードン・ベネットと夫婦になった。夫妻からは男女二人ずつ、合計四人の子供が生まれ、富三郎が子宝に恵まれなかったため、知られる限りでは父トマスの血を引く唯一の子孫となるが、彼らとその末裔とは、著名であった祖父とその兄弟に倣って、世界各地に分散してそれぞれの活躍の場を求めることになった。

一九〇八年、グラバーは明治天皇から勲二等旭日章を賜った。当時提出された和文の記録書には、彼の日本に対する功績の数々が二〇頁に亘って紹介されている。叙勲後、勲章を佩用して撮影された記念写真に見られるグラバーは、いかにも誇らしげな顔をしている。

グラバーは人生最後の三年間のほとんどを東京麻布の屋敷で過ごした。一九〇九年にハルピンで殺害された伊藤博文が寄贈したと伝えられる離れ屋が建て増しされた屋敷で、グラバーは相変わらず客を持って成し、依頼があれば相談に乗り助言を与えていたが、一九一一年二月一六日ついに帰らぬ人となった。死因は腎臓疾患の一種であるブラ

イト病と診断された。彼の葬儀は東京の聖三一教会で盛大に執り行われ、各界の重鎮を含む大勢の弔問客が訪れた。遺骸は東京で荼毘にふされ、骨灰は坂本町の国際墓地に埋葬されるべく長崎に運ばれた。ある新聞の死亡記事欄には「グラバー氏ほど日本人に信頼され、日本人を理解した外国人は絶えて一人とていなかった……彼が心を許した友には、故伊藤公爵、大隈伯爵、井上侯爵その他の重鎮がいる」とある。

グラバーが遺した遺産は、苦くて甘みのあるものだ。古い幕府体制に風穴を開け、多くのエリート侍が国際的な教育と外交術を身に着ける機会を提供して日本の近代化に大きく貢献する一方、武器や軍艦を調達して日本帝国の軍事化を推し進め、日本とグラバーの子孫が今や故国と呼んでいる国々との戦端を開かせてしまった。

\* \* \*

このように、グラバーは様々な活動に携わった稀有の人物である。決して、幕末維新の武器商人としてのみ記憶されるべきではない。昨年、NHKの大河ドラマとして放映された『龍馬伝』にもグラバーは現れ、龍馬が薩長同盟を結ばせるため奔走し、グラバーにライフル銃と艦船の調達を依頼している。これが基となって、倒幕が実現し、新し



談に乗り助言を与えていたが、一九一一年二月一六日ついに帰らぬ人となった。死因は腎臓疾患の一種であるブラ

い近代日本の夜明けが訪れることになる。グラバーは、ある意味で、その功労者ではあるが、その時彼はまだ二九歳であった。本当は、そこから彼の波乱万丈の人生が始まるのである。グラバーの物語は、興味が尽きない。

\*本稿の作成には、鳴門教育大学専任講師、杉浦裕子氏の助力を仰いだ所がある。



グラバー夫妻の墓（長崎、坂本墓地）



小菅スリップドック跡地（長崎市）

結ばせるため奔走し、グラバーにライフル銃と艦船の調達を依頼している。これが基となって、倒幕が実現し、新し